

律蔵にあらわれる阿闍世と韋提希

山 極 伸 之

【1】 はじめに

周知のごとく、『観無量寿経』（以下『観経』とする）は韋提希（Vedehi；Vaidehi）を主人公としてその物語が展開される經典である。特に経の冒頭に位置付けられている導入の物語—いわゆる序分—は、しばしば「王舎城の悲劇」と呼ばれ、『観経』の重要な構成要素の一つとなっている。『観経』の序分は、摩竭陀国の王子である阿闍世（Ajātasattu；Ajātasātru）が提婆達多（調達；Devadatta）にそそのかされて父王である頻婆娑羅（Bimbisāra）を幽閉した、という場面設定から始められる。その後、父王の延命につとめる韋提希も幽閉され、韋提希は悲嘆の中で釈尊に救いを求める。願いを聞いて韋提希の前に姿を現した釈尊に、彼女は清浄な阿弥陀仏の極樂世界生まれるための教えを求める。この求めに応じて世尊は韋提希に、極樂世界を觀想するための方法を説き、それが『観経』の中心的内容を構成することになる。

この導入物語は、仏典にしばしば現れる「阿闍世の父殺し」の物語（あるいは阿闍世王説話）と対比され、説話の伝承過程や発展の歴史に関して、これまでも度々注目されてきた¹⁾。中でも末木文美士は『観経』に関する一連の研究の中で、先の導入物語と対応する阿闍世王説話を精査し、『観経』序分の成立過程を考察しながら、『観

1) 阿闍世説話に関する研究は多いが、本小論との関わりで特に重要と思われるものとしては次の研究が挙げられる。

小野玄妙「阿闍世大王の事蹟及び其の圖像」（『小野玄妙佛教藝術著作集〈第二卷〉佛教之美術及び歴史〈上〉』所収）、1977年、東京；開明書院、386-434頁。

平川彰「大乘經典の發達と阿闍世王説話」『印度学仏教学研究』、第20巻第1号、1971年、1-12頁。

小丸真司「『観無量寿経』における阿闍世・韋提希説話について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、別冊第9号、1982年、41-49頁。

同「無根信について」『東洋の思想と宗教』（早稲田大学東洋哲学会編）、第3号、1986年、75-92頁。

定方晟「阿闍世の救い」、1984年、京都；人文書院。

藤田宏達「観無量寿経講究」、1985年、京都；真宗大谷派宗務所。ノ

経』自体の起源にも関係する優れた研究を公にしている²⁾。末木は、特に『根本説一切有部毘奈耶破僧事』(以下、破僧事とする)に見られる説話との類似性に注目し、両者を詳細に比較することによって、序分に関してはその起源を中央アジアに求めると論じている。この点を論ずる際に、末木は律蔵全体を視野に入れてその発展過程も考慮しながら、最終的に説一切有部が保持していた阿闍世説話の影響を『観経』の作者(あるいは編者)が最も強くうけたのではないかと推測している³⁾。結論的に言って本小論は末木の一連の研究を超えるものではないし、また筆者も末木の先の考えに基本的に同意するものであるが、末木は論文(及び著書)の性格上、律蔵にあらわれる阿闍世と韋提希に関わる説話については、『観経』と直接に対応するもののみを具体的に掲げるにとどめており、律蔵という文献の立場から見て阿闍世や韋提希がどのように位置付けられているのかは明確にしていない⁴⁾。そこで、本小論では律蔵全体の中に散見される阿闍世と韋提希の用例を可能な限りすべて抽出し、彼らがどのように描かれているのかについて考察を行い、『観経』序分と対比される破僧事への展開を改めて検証することを目的とする。

一方、近年ジョナサン・シルク(Jonathan A. Silk)は『観経』序分に対応する物語を有するジャイナ文献中の諸説話に注目し、その内容を比較検討することで、『観経』序分のモチーフは既にインドにおいて存在していたことを論証している⁵⁾。シルクの研究は仏教以外のインド文献を用いている点で極めて重要であるが、彼が具体的

ゝ 末木文美士 “Some Problems of the *Kuan-wu-liang-shou-ching*” 『印度学仏教学研究』, 第31巻第1号, 1982年, 465-462頁。

同 ““The Tragedy in Rājagṛha” in the *Guan-wu-liang-shou-jing*” 『東方』, 第2号, 1986年, 255-264頁。

同 「『観無量寿経』研究」 『東洋文化研究所紀要』, 第101冊, 1986年, 163-225頁。

同 「観無量寿経一観仏と往生」 『浄土仏教の思想第二巻 観無量寿経 般舟三昧経』, 1992年, 東京; 講談社, 1-195頁。

Jonathan A. Silk, The Composition of the *Guan Wuliangshoufo-jing*: Some Buddhist and Jaina Parallels to its Narrative Frame, *Journal of Indian Philosophy*, No. 25, 1997, pp. 181-256.

この他にも間接的に関係を有する研究は多数存在するが、それらについては上記の末木文美士「観無量寿経一観仏と往生」、及び Jonathan A. Silk の上記論文に大変詳細な参考文献が示されているので、それらを参照されたい。

2) 注1前掲, 末木論文(及び著書)参照。

3) 例えば, 注1前掲末木論文の ““The Tragedy in Rājagṛha” in the *Guan-wu-liang-shou-jing*” 258-264頁, 及び「観無量寿経一観仏と往生」47-73頁参照。

4) 末木に限らず, 阿闍世・韋提希説話が律蔵に存在し, 『観経』序分との関係を考える上で重要であることは, 先に掲げた多くの先行研究中でしばしば指摘されている。しかし, 律蔵全体を対象として, その中にあらわれる阿闍世・韋提希の姿を総合的に論じている研究は, 管見の及ぶ限りでは存在しない。従って, 律蔵そのものの研究に対しても, 本小論が掲げる資料や考察は, 種々に資するところを有するものであると考える。

5) 注1前掲, Silk 論文参照。

に示しているジャイナ文献中の説話は、『観経』序分の成立の問題だけでなく、律蔵との対応関係について考える上でも重要となる箇所を有している。その意味でも、現存する個々の律蔵において、阿闍世・韋提希説話という特定のモチーフがいかなる様相を呈しているかを明らかにすることは、十分に意義を有するものであると考える。

尚、本小論ではその対象を阿闍世と韋提希に限定し、あくまでも律蔵内での両者の位置づけを明確にすることを目的とするため、ここでは初期經典や大乘經典、さらにはアビダルマ文献などに説かれている阿闍世・韋提希説話については対象としない。従って、それらすべての文献の調査の上に成立する『観経』（および序分）の起源の問題は、ひとまず置くことにする。また、資料として用いた律文献は、律蔵としての姿を完備しているパーリ律・五分律・四分律・摩訶僧祇律・十誦律・根本説一切有部律（いわゆる六広律）、及び鼻奈耶の七種に限定したことをあらかじめ断っておく。

【2】 パーリ律にあらわれる阿闍世・韋提希

①破僧健度 (Saṃghabhedakkhandhaka)

(a)世尊がアヌピヤにいたとき、マハーナーマとアヌルッダが出家を志すが、マハーナーマが家業を継ぎ、アヌルッダのみ出家しようとする。彼の母が王バッディヤと一緒にならばと許可し、アヌルッダはバッディヤに出家を求めるが七日待ってくれと頼まれる。バッディヤは仲間の、アヌルッダ、アーナンダ、バグ、キンピラ、デーヴァダッタ、ウパーリカッパカと共に外出し、ウパーリカッパカのみ帰して出家しようとする。最終的にウパーリカッパカもサキヤ族の童子たちも出家をし、その時バッディヤが三明を、アヌルッダが天眼を、アーナンダが預流果を、デーヴァダッタが世俗的 (pothujjanika) な神通を得た。(PTS. Vin. II, pp. 180.1-184.29)

(b)世尊がアヌピヤ国からコーサンビーへと移り、コーサンビーのゴーシタアーラーマに留まっていた時、デーヴァダッタは誰の信頼を獲得して利益を得ようかと考え、幼くて将来に吉祥のあるアジャータサットゥに近づくことを考える。そこで彼は王舎城のアジャータサットゥのもとへと行き、神通を示してアジャータサットゥの信頼を得て多くの利益を獲得するが「比丘サンガを手に入れよう (bhikkhusaṃghaṃ pariharissāmi)」と考えて神通を失ってしまう。その後、カクダ天子によって目連は、デーヴァダッタが神通を失ったことを知り、世尊はそれにちなんで「否定されるべき五種の師」(戒不清浄・命不清浄・説法不清浄・記説不清浄・智見不清浄)についてを説く。さらに比丘たちに対して、デーヴァダッタのアジャータサットゥ

からの利得は、デーヴァダッタを害するものでしかないことを、芭蕉、竹、蘆、驢馬の譬喩によって説く。(pp. 184.30-188.23)

- (c)世尊が王を交えた大集会で法を説いていたとき、デーヴァダッタは世尊に比丘サンガを放棄し自分に譲るように求めたが、世尊はこれを退けた。それがデーヴァダッタの第一の恨み (āghāta) となった。そこで世尊は比丘たちに、デーヴァダッタに対して「顕示羯磨 (pakāsanīya-kamma)」をなすことを命じ、具体的な「顕示羯磨」の方法や、舍利弗を「顕示羯磨」を行うものとして選ぶための羯磨の方法を示す。これによって舍利弗が選ばれ、実際に王舎城で「顕示羯磨」が行なわれる。(pp. 188.24-190.14)

- (d) ①その時、デーヴァダッタは、アジャータサットゥのもとへ行き、王子に父を殺して王となることを勧め、自分は世尊を殺してブッダとなる (aham bhagavan-tam hantvā buddho bhaviṣṣāmi) ことを申しでる。これを聞いてアジャータサットゥは王を殺そうとするが、大臣たちがこれを知る。大臣のうちの一部の者は「王子、デーヴァダッタ、一切の比丘を殺すべきだ」と主張し、一部の者は「王子とデーヴァダッタのみ殺すべきだ」と主張し、一部の者は「誰も殺さずに、王にしらせるべきだ」と主張した。そこで彼らは、王子と共にビンピサーラのもとへと行った。
- ②ビンピサーラは、大臣たちの主張をそれぞれ聞いて、顕示羯磨が行われていることを踏まえて、「王子、デーヴァダッタ、一切の比丘を殺すべきだ」と主張する大臣を免じ、「王子とデーヴァダッタのみ殺すべきだ」と主張する大臣を下位に置き、「誰も殺さずに、王にしらせるべきだ」と主張する大臣たちを上位に置いた。
- ③そこでビンピサーラは、アジャータサットゥに、なぜ自分を殺そうとするのかを尋ねた。王子が王位を欲しているためであることを聞いたビンピサーラ王は、王子に王位を譲る。

(pp. 190.15-191.25)

- (e)その後、デーヴァダッタは王となったアジャータサットゥに、人を使ってブッダを殺すように命じ、アジャータサットゥがそれを実行しようとする。〈以下、世尊を殺そうとする様子などが示されるが省略。最終的にこれらの計画は失敗し、デーヴァダッタは破僧を行うこととなる。以後にアジャータサットゥは登場しない〉(pp. 191.26-206.23)

②五百韃度 (Pañcasatikakkhandhaka)

- (a)王舎城で五百人の阿羅漢が集まって結集を行うことになる〈アーナンダも最終的に阿羅漢となって参加する〉。(PTS. Vin. II, pp. 284.1-286.15)
- (b)マハーカッサパがウパーリに律を問い、両部の律を定める。(pp. 286.16-287.9)
- (c)次に、マハーカッサパはアーナンダに法を問い、まず『梵網經』が説かれた場所と因縁を尋ねる。さらに『沙門果經』が説かれた場所と因縁を尋ね、アーナンダは因縁に関して「アジャータサットゥ・ヴェーデーヒプッタと一緒に時に」と答える。以下同様に五ニカーヤ (pañca-nikāya) について尋ね、法が定められる。
(p. 287.10-287.28)
- (d)〈以下、小小戒の問題などが説かれるが省略〉(pp. 287.28-293.14)

以上、パーリ律においては破僧健度と五百健度の二カ所にしか阿闍世は登場しない。「父殺し」の説話と関係するのは破僧健度に見られる物語の方であるが、(d)の㊦に示した様に、ビンビサーラ王が阿闍世に王位を譲るという記述は見られるものの、その後ビンビサーラがどうなったかについては言及されない。また、五百健度の場合も『沙門果經』の成立事情に関わったのが阿闍世であることを示しているだけで、それ以上の情報は示されていない。結局、パーリ律には「父殺し」を行った阿闍世の姿は全く描かれていないことになる。

一方、韋提希に関しては、阿闍世の名称を示す時に用いられている例が五百健度に一例見られるだけで (Ajātasattunā Vedehiputtana ; Vin. II, p. 287.24-25), 具体的な人物としては登場していない。

【3】 五分律にあらわれる阿闍世・韋提希

①經分別；波羅夷2条（盜戒）因縁譚

波羅夷の学処が最初に制定される直前に、世尊が摩竭大臣に「阿闍世王の王法では人が盗みを犯した場合、どれだけ盗むと死罪になるか」を尋ね「五錢以上ならば死罪になる」との答えを受け、それによって波羅夷となるのを五錢以上のものを盗んだ場合に定める。(T. 22, p. 6a3-8)

②經分別；僧殘13条（破僧違諫戒）因縁譚

- (a)釋摩男と阿那律の出家譚に端を発し、跋提王・阿那律・阿難・難提・調達・婆婆・金鞞廬、剃頭人優波離の八人が出家する。世尊は彼ら八人に法を説き、阿難と調達以外の六人が阿羅漢を得る。(pp. 16c21-17c14)

(b)調達は神通を得ようと学を修し、これを獲得する。それを示す相手として瓶沙王の太子（「名曰衆衆」とされる）を選び、神通を示して信頼を得て多くの利益を獲得する。〈以下、パーリ同様に柯然天子、目連、世尊の話と続き、芭蕉、竹蘆、驢馬の譬喩が説かれる〉（p. 17c15-18b11）

(c)世尊が王等を交えた大集会で法を説いていたとき、調達は世尊に、衆僧を放棄し自分に譲るように求めたが、世尊はこれを退け調達の恨みとなった。〈この後に調達の前生譚が説かれる〉

その後、世尊は舍利弗に、「五法教」を唱えた調達に賛同した衆に対して「羯磨（顕示羯磨）」をなすことを命ずる。（pp. 18b12-19a17）

(d)①神通を失った調達は、瓶沙王の太子に、父を殺して王となることを勧め、自分は世尊を殺して法王となることを申しでる。太子は一旦は拒むが、調達の巧言により同意して王のもとへと赴く。〈以下、大臣たちの話が続くが、内容的にはパーリ律と共通する〉（p. 19a18-b17）

②瓶沙王は、大臣たちが王子に王位を譲ることを進言したため、それに同意して王子に王位を譲る。王子は王となり「阿闍世」と名乗る。それにより阿闍世の父殺害の思いは暫く消え、その後少しの間は無事であったが、最終的に父王は殺されてしまう〈「殺逆之心便得暫息。如是少時乃以無事而害父命」〉。（p. 19b17-23）

(e)調達は阿闍世王が持っていた大象の象師に、世尊を殺すように命ずる。

〈以下、世尊を殺そうとする様子などが示されるが省略；最終的にこれらの計画は失敗し、調達は破僧を行うこととなるが、この部分では破僧と世尊を害することとが同一視されており、破僧そのものの因縁を明かすことにはなっていない（五法も説かれない）；その後に学処・条文解釈などが続く〉（pp. 19b24-21b4）

③健度部；受戒法

〈受戒を行う際の障法中、王の家臣（属官人）への受戒の禁止を定める部分〉

阿闍世王に一健将がいて、彼が出家を望み、比丘が度してしまった。これを知った王が激怒し、それを禁ずる法を制定したため、世尊が「属官人」を度することを禁止する。（p. 116b1-18）

④調伏法；波羅夷4条に関する部分

過人法（過上人法）の判例を示す中に、目連が波斯匿王と阿闍世王の戦いの結果を予言する例が示される。ここでの目連の予言ははずれるが、世尊は「前を観じて後を観じなかっただけである」として妄語とはしない。（p. 185a2-6）

以上が、五分律に見られる用例である。「父殺し」の説話と対応するのは②に掲げた「僧残13条」に関する部分で、そこに示される内容は、ほぼパーリ律の破僧犍度と一致すると見ることができる。但し、五分律はこの物語を経分別中に組み込んでおり、パーリ律とはこの問題を処理する箇所が異なっている。また、パーリ律では言及されなかった「父王の死」が簡潔ではあるが語られていて、前後の関係から阿闍世が父王を殺害したと見てよいと思われる。尚、五分律の破僧法（破僧犍度に対応）、及び五百集法（五百犍度に対応）に阿闍世は登場しないが、それ以外の箇所ではパーリ律には見られない阿闍世に関する言及が存在している。また、管見の及ぶ限り、五分律には韋提希は登場していない。

【4】 四分律にあらわれる阿闍世・韋提希

①経分別；僧残10条（破僧違諫戒）因縁譚

(a)釋種子の阿那律と摩訶男の出家譚に端を発し、阿那律・跋提王・難提・金毘羅・難陀・跋難陀・阿難陀・提婆達・優波離（剃髪師）の九人が出家を希望し、世尊及び大上座らが彼ら九人を度す。提婆達以外は増上地を證し、提婆達は神足證を得る。

(T. 22, pp. 590b13-591c16)

(b)くはじめに未生怨の命名の由来（婆羅門の占いによる）が示される

提婆達は徒衆を蓄えるために、神通により王子の信頼を獲得しようとする。〈四分律ではこの後に迦休拘羅子天子の話が入る〉提婆達は王子に神通を示して信頼を得て多くの利益を獲得する。(pp. 591c16-592a20)

(c)提婆達が阿闍世から多くの飲食を施されると、世尊はそれ以上に瓶沙王から施しを受けた。これに嫉妬した提婆達は、世尊に僧（サンガ）を自分に譲るように求めたが、世尊はこれを退けた。(pp. 592a20-592b11)

(d)①提婆達は王子に、父を殺して王となることを勧め、自分は世尊を殺して新佛となることを申しでて、王子もそれに同意する。〈以下、提婆達が世尊を殺害しようとする場面が説かれ、最終的に世尊の身体から出血させるだけで計画は失敗する。その後、「五種の師」が語られる（パーリ律①(b)参照）〉(pp. 592b11-593a29)

②世尊は比丘たちに、提婆達の行為が佛法僧にあらざることを示すために羯磨（＝顕示羯磨）をなすことを命じ、舍利弗に対して具体的な羯磨の仕方を示す。その後で舍利弗が実際に羯磨を行う。(p. 593a29-c1)

③その時阿闍世は、密かに刀を持って宮中に入り、王を殺害しようとするが、守門

の者に見つかり、王を殺そうと企てていること、それを提婆達ちに教えられたことが発覚する。臣のうちの一部の者は「王子、提婆達、沙門釈子を殺すべきだ」と主張し、一部の者は「王子と提婆達のみ殺すべきだ」と主張し、一部の者は「誰も殺すべきではない」と主張した。(p. 593c1-13)

- ① 守門の者がこの様子を瓶沙王に伝え、王は顕示羯磨が行われていることを踏まえて、誰も殺してはならないと命じ、阿闍世を呵責した上で、大臣たちに阿闍世太子を許すよう伝える。(pp. 593c13-594a1)

※阿闍世に王位を譲る話も、その後瓶沙王がどうなったのかも示されない。

- (e) 悪名の流布した提婆達は、他に四人の仲間を得て乞食を行っていた。これを聞いた世尊は、四人以上の別衆食を禁止したが、これを納得しない提婆達が破僧輪を企て、五法を主張した。これに同調しようとする者が出たため、世尊は提婆達を呵責し破僧を思いとどまらせ、その後で学処を定める。〈以下、学処・条文解釈などが続く〉(pp. 594a-595c)

※提婆達が破僧を実際に行ったとはされていない。

② 経分別；単提（＝波逸提）33条（別衆食戒）因縁譚

世尊が耆闍崛山にいたとき、提婆達多は人を使って佛を害させ、阿闍世王（Sic.）を使って父（王）を殺させた⁶⁾。そのため悪名の流布した提婆達多は、他に四人の仲間を得て乞食をおこなっていた。これを聞いた世尊は、提婆達多を呵責して四人以上の別衆食を禁止して学処を定めた。(p. 657b11-c6)

〈以下、随戒、判例などが続く〉

③ 健度部；衣健度

〈十種の糞掃衣が示され、その中の「往還衣」を具体的に示す部分の例〉

- (a) 拘薩羅国波斯匿王と摩竭提王阿闍世が戦って死人が多くでた。その死人の衣の扱い方が示される。
- (b) 阿闍世と毘舍離梨奢が戦って死人が多くでた。その死人の衣の扱い方が示される。(p. 850a28-b5)

④ 調部；波羅夷4条に関する部分 ※五分律[1]④と対応

過人法（過上人法）の判例を示す中に、目連が波斯匿王と阿闍世王の戦いの結果を

6) この部分では「爾時提婆達既教人害佛。復教阿闍世王（明；正）殺父」とされている。一方、前述の(e)の部分に、同様の文章が存在するが、そこでは「爾時提婆達既教人害佛復教阿闍世害父」(p. 594a1-2)とされており、「殺父」とは記されていない。いずれにしても、この「別衆食」に関する部分は、前述の①の(e)を踏まえて構成されているとみてよいと思われる。

予言する例が示される。ここでの目連の予言ははずれるが、世尊は「前を見て後を見なかっただけである」として無犯とする。(p. 985b22-c6)

以上が、四分律に見られる用例である。「父殺し」の説話と対応する話が、「僧残10条」において示される点や、破僧毘度、五百毘度に阿闍世が登場しない点などに五分律との共通点が見られる。①に示した「僧残10条」の内容については、大筋ではパーリ律・五分律とほぼ一致すると考えられるが、阿闍世が父王の殺害を試みる場面については、因縁譚の構成要素やその順序に異同が見られるし、父王が阿闍世に王位を譲る話なども欠けているが、最終的に提婆達に唆されて、阿闍世が父王を害した（あるいは殺した）との内容は五分律と同様に提示されている。また、破僧と関係する話の延長として「別衆食」の因縁譚に阿闍世が現れてくる点は注目に値する。尚、四分律にも、韋提希は全く登場していない。

【5】 摩訶僧祇律にあらわれる阿闍世・韋提希

①経分別；波羅夷1条（姪戒）；判例部分

世尊が王舎城にいるとき、阿闍世王に優陀夷跋陀羅という子が生まれた。この子の陰部が虫に食われ、薬でも治癒できなかった。看護をする者が口はその部分を含んで暖めると痛みがひいたので、しばしばこれが行われ、暖かきで不浄を漏らすことがあった。結局それによって虫が外に出て病気は治ったがそれが習慣となり、これが世間にも知られ真似をするものが出てきた。そこで阿闍世王はそのようになした者を重罪に処することを定める。その時、優波離は世尊に口での姪は波羅夷にあたるかを尋ねる。世尊は、比丘同士の場合は共に波羅夷になると定める。

(T. 22, pp. 234c11-235a9)

②経分別；波夜提4条（發諍戒）の条文解釈

〈ここでは特に「諍事」についての詳細な解説が行われており、その中の「憶念毘尼」の説明部分に以下の記述が含まれている〉

- (a)王舎城で慈地比丘尼が不浄を行い妊娠してしまい、六群比丘の指示に従って、相手を陀驪摩羅子（＝グッバマツラプッタ）であると偽った。最終的に陀驪摩羅子は罪を犯していないことが認められ無犯となるが、慈地比丘尼が驅出（追放）を命ぜられる。これを比丘尼に対する一方的な判定と考えた比丘尼たちは、世尊の教えに従わなくなったので、世尊は比丘たちにも告げずにそこを去った。

(pp. 328c14-329b15)

- (b)その時、韋提希の子である阿闍世王は父王を殺してしまったことを後悔し、毎日三回、世尊のもとへと来て懺悔をしていた。ところが世尊がいないので比丘たちに理由を聞き、比丘尼たちに腹を立てて、比丘尼をすべて領内から駆出した。

(pp. 329b15-329c1)

〈最終的に比丘尼たちが世尊に懺悔して事態は収まる〉

③経分別；波夜提49条（捉寶戒）；因縁譚

- (a)佛が王舎城にいたとき、韋提希の子である阿闍世王は、どの沙門婆羅門のもとへ行けばよく善根を長養できるかを大臣に尋ね、不蘭迦葉、薩遮尼乾子を勧められた後、耆婆童子に世尊を勧められ、世尊のもとへと赴く。〈以下『沙門果経』に相当する導入話が示され、詳細な内容は「如現法沙門果経中廣説」として省略されている〉

(p. 369c18-370a27)

- (b)その直後に、「その時、阿闍世王は殺父罪があるために、心に常に恐怖を抱き、城中の様々な音を聞くだけでひどく驚き畏れたりしたので、すぐに城に帰ろうとした」という内容が続き (p. 370a28-b1), それが発端となって、以下に「寶」を手にしてはならないという規定の因縁が語られる。(p. 370b1-c18)

④雜誦跋渠法；「布薩法」中の「堂」の解説部分

佛が王舎城にいたとき、阿闍世王は耆闍崛山に布薩堂を作り、種々に装飾を施して、金華鏤をなした。(p. 447b11-13)

〈以下、布薩の際にサンガに清浄でないものがいたので、世尊が布薩を自ら行わず、比丘自身が布薩を行うようになる経緯が語られる〉 (pp. 447b13-447c2)

⑤雜誦跋渠法；「鉢法」中の諸規定に関する部分

- (a)佛が王舎城にいたとき、阿闍世王は大新堂を作った。(p. 461c27-28)

〈以下、その時の残余の木材を用いた鉢の使用（＝禁止）に関する規定へと続く〉

(pp. 461c28-462a14)

- (b)佛が王舎城にいたとき、阿闍世王は毘舍離の離車と確執があった。(p. 462a14-15)

〈以下、阿闍世の得たマニを鉢として与える相手として、薩遮尼捷子と世尊とが考えられ、世尊はそれを受けることは禁止するが、その結果薩遮尼捷子が世尊を怨む話へと続く（さらに鼈生経、鸚鵡生経の名が示される）〉 (p. 462a15-b15)

⑥雜誦跋渠法；「毘尼法」中の「獅子將軍」の解説部分

佛が毘舍離城にいたとき、阿闍世王は毘舍離の離車と確執があった。阿闍世王は毘舍離を攻めようとし、その時毘舍離の獅子將軍が目連に戦いの結果を予言してもら

う。

〈以下、他律の過人法（過上人法）の判例を示す中にある目連の予言に関する例と共通（目連の予言ははずれるが、世尊は「前を見て後を見なかっただけである」として無犯とする）〉（p. 466a21-b14）

⑦雑誦跋渠法；「屐法（使ってはならない履物の規定）」の冒頭部分

佛が王舎城耆舊童子菴拔羅園にいたとき、佛は阿闍世王のために『沙門果經』を説いた。〈以下、種々の履物に関する規定が続く〉（p. 482a25-b13）

⑧雑誦跋渠法；「五百比丘集法藏」の部分

(a)佛が毘舍離城にいたとき、阿闍世王韋提希子は毘舍離の離車と確執があった。

〈以下、「如大泥洹經中廣説」として涅槃の場面が省略される〉（p. 489c26-28）

(b)第一結集（法藏）を開催するにあたって大迦葉が「世尊は韋提希子阿闍世王は声聞優婆塞無根信の中で第一であると記していたので結集は王舎城ですべきである」と表明する。（p. 490b19-c3）

〈以下、五百結集の具体的な内容が続く（pp. 490c3-493a19）〉

以上が、摩訶僧祇律に見られる用例であるが、この律は六広律のうち唯一大衆部系の律であることもあって、他律とは異なる点が幾つか見られる。まず上記の例によって明かなように、摩訶僧祇律には「阿闍世の父殺し」説話と対応する話が存在しない。周知のように摩訶僧祇律の犍度部相当部分は他律と構造的に大きな異なりを有するため⁷⁾、組織的に「破僧犍度」を持たず部分的に破僧を解説する箇所を有するだけであるが、いずれにしても提婆達多との関係で阿闍世が「父殺し」を行う場面はどこにも描かれていない。それは他律と比較的内容が一致する経分別の僧残10条（破僧違諫戒）の部分でも同じである。しかし、「阿闍世が既に父王を殺した」という記述だけは存在している。従って、その経緯に関しては何の情報も提示されないが、この律の編纂者には「阿闍世は父を殺した」という認識が明確にあったと見ることができる。この他にも、上記の三律には存在しなかった、①の阿闍世の子供に関する物語は、以下に見る十誦律・根本説一切有部律、及びジャイナ文献との関わりを考える上で重要と思われるし、阿闍世が仏教の保護者的な姿で描かれる例が多くなっている点などに

7) この点に関しては、次の論文を参照されたい。佐々木閑『『摩訶僧祇律』跋渠法・威儀法内容一覽』『花園大学研究紀要』、第24号、1992年、1-26頁。Shizuka Sasaki, Buddhist Sects in the Aśoka Period (4) —The Structure of the Mahāsaṃghika Vinaya—, 『佛教研究』、第23号、1994年、55-100頁。

も注意が必要である。尚、韋提希に関しては、パーリ律と同様に阿闍世の名前に「韋提希子」が付される例は幾つか見られるが (p. 329b; 369c; 489c; 490c), それ以外に韋提希は登場しない。

【6】 十誦律にあらわれる阿闍世・韋提希

①経分別；波羅夷2条（盜戒）；因縁譚

- (a) <達尼迦比丘の因縁譚の一部> 自分で作った赤色の泥舎が世尊の命で壊されたのを知り、達尼迦は王舎城の材木師のところへ行き、韋提希子阿闍世王が自分に材木を与えたと語った。(T. 23, p. 3b8-c7) <以下、因縁譚がさらに続く>
- (b) 学処の最初の結戒の直前に、世尊が阿難に命じて「阿闍世王は、人が盗みを犯した場合どれだけ盗むと大罪としているか」を衆人に尋ねさせ、「五錢あるいは五錢に相当するものを盗めば大罪になる」との答えを受け、それによって波羅夷となるのを五錢に定めた。(p. 4a21-27)

②経分別；波羅夷4条（妄語戒）；判例部分

目連が入定中に、跋耆の夜叉と摩竭陀の夜叉とが争い跋耆の夜叉が勝つを見て、定から起って比丘に、跋耆の人が摩竭陀の人と争い、跋耆の人が勝つと予言した。その後、阿闍世王が跋耆の人に勝ったので、これが妄語ではないかと問題になる。世尊は「前を見て後を見なかったただけである」として無犯とする。(p. 13a16-b8)

③経分別；波夜提36条（別衆食戒）；因縁譚

佛が王舎城にいるとき、阿闍世王は提婆達を信じ、彼を食事に招待したところ、提婆達に誘惑された年少比丘など大勢の比丘たちが提婆達と一緒に食事にでかけ、種々の問題を起こした。そこで佛は、別衆食を禁止する。(p. 93b11-c14)

④雑誦・調達事 ※他律の破僧健度に相当

- (a) 出家した調達は、佛、舍利弗、目連などに神通力の教えを求めるが皆に拒絶され、最終的に阿難に教えてもらって、世俗の四禪を得て神通力を獲得する。
(p. 257a4-b24)
- (b) 調達は悪心により、瓶沙王の太子である阿闍世に神通力を示して信頼を得て、多くの利益を獲得する。(p. 257b24-c16)
- (c) 比丘たちがこの様子を佛に告げるが、佛は芭蕉、竹蘆、驢馬の譬喩によって調達を非難する。(pp. 257c17-258a9)
- (d) 目連は迦扶陀天子により、調達が神通力を失ったことを知る。その後、調達は佛に、

衆僧を譲るように申し出るが、佛はこれを退ける。そのため調達は佛に瞋恨心を抱くが、佛は比丘たちに「五種の師」について語る (pp. 258a9-259a8)

- (e)その後、調達は和合僧を破そう考えて、四人の仲間を集め、五法を唱えて破僧を企てる。〈この時の破僧は佛の諫めに従って一旦は収束し、破僧とはならない〉

(p. 259a9-c14)

- (f)佛が王舎城にいるとき、阿闍世王は提婆達を信じ、彼を食事に招待したところ、提婆達に誘惑された年少比丘など大勢の比丘たちが提婆達と一緒に食事にでかけ、種々の問題を起こした。そこで佛は、別衆食を禁止する。(pp. 259a9-260a12)

※この部分は上記③経分別；波夜提36条（別衆食戒）の部分と一致する

- (g)調達は佛を害そうと、人を使って佛に石を落とす〈結局は佛の足から血を出すだけで、殺害の企てはことごとく失敗する〉。それにより佛は阿難に命じて、調達の行いは佛事法事僧事ではないということを、王舎城の人々に知らせる〈但し、これを羯磨とは言わない〉。(p. 260a13-c11)

- (h)①佛への瞋恨心を増幅させた調達は、阿闍世太子のところへ赴いて、太子に父を殺して王となることを勧め、自分は佛を殺して新しい佛となることを申しでる。王子もそれに同意する。(p. 260c11-17)

②阿闍世は、瓶沙王が林園から戻ってくるのを待ち伏せ、剣を投げて殺そうとするが、王はこれを免れる。阿闍世は逃げるが、家来たちに捕らえられ王の前に連れ出される。王が太子に理由を尋ね、太子は調達の勧めによることを白状する。これを聞いて、ある大臣は「一切の沙門釈子を殺すべし」と主張し、ある者は「調達とその弟子のみ殺すべし」と主張し、ある者は「調達のみ殺すべし」と主張し、ある者は「誰も殺すべきではない」と主張した。最終的に瓶沙王は、誰も殺してはならないと命ずる。(pp. 260c17-261a22)

③王は阿闍世太子に、何故、王の命を奪おうとするのかを尋ね、その後阿闍世に自分と同じ王としての立場を与える（王位を阿闍世に譲るのではない）。この結果、一国に二人の王がいるような状況となり、これに乗じて調達が再び阿闍世に、瓶沙王を殺すことを勧める。阿闍世は家臣に命じて父王を捕らえ牢獄にいれるが、父王に惹かれる多くの人々が食べ物を持って牢獄を訪れるため、王は生き長らえた。これを知った阿闍世は、牢獄の番人に人が入ることを禁止させる。すると今度は、王の夫人が密かに父王に食べ物を差し入れた。阿闍世は夫人が牢獄に入ることを禁ずる。次に、大夫人が食べ物を衣に塗り、さらに上に衣をつけてそれを隠して、父王に差し入れをした。これを知った阿闍世は、大夫人が牢獄に入るこ

とも禁ずる。(p. 261a22-b20)

- ④次に父王は、獄中から耆闍崛山を見て、佛、舍利弗、目連などが山を上り下りするのを見て歓喜し、それによって生き長らえる。それを知った阿闍世は、外が見えないように障碍を置くことを命ずる。すると今度は佛が王舎城へと入城し、それによって様々な奇瑞がおこった。奇瑞がおこったことにより佛が入城したことを知った父王は、隙間から佛を見て聖道を獲得し、それによって生き長らえた。これを知った阿闍世は、刀で父王の脚の底を削り皮をはがせた。その結果、父王は日毎に衰弱していった。(p. 261b20-c19)

- ⑤ある時阿闍世が母と共に食事をしていた。阿闍世には優陀耶跋陀という子供がいたが、そのとき優陀耶跋陀は狗と戯れていて、食事に呼ばれても狗と一緒に食べようとしたため、阿闍世はこれを許す。阿闍世はこれを「難事をなした」としたが、母は父王がかつて阿闍世に行った「難事」—阿闍世が幼い頃に手の指に腫れ物ができて痛みで眠れなかったとき、父王はこれを口にふくんで暖めて痛みをとり、さらに膿までも飲んだ—を語り、王を牢獄から出すように願う。阿闍世はこれを聞き入れ、人々が喜んで父王の牢獄にかけつける。それを聞いた父王は、阿闍世は悪逆で慈悲心がないため、自分に何をなすかわからないと考え、自ら床下に身を投じ命を断った。これにより、阿闍世は父王の命を奪い大逆罪を得た。(pp. 261c19-262a10)

- (i) <調達阿闍世の持っていた「守財」という象を使って佛を殺害しようとする話(三種の本生譚を伴う)> (pp. 262a11-264b15)
- (i) <調達が五法を主張して破僧を行う話(本生譚、優波離の破僧に関する問い(14破僧事)を含む)> (pp. 264b-267a)

⑤雑誦・雑法 ※他律の雑事、威儀毘度などに相当

佛が王舎城にいたとき、瓶沙王は竹園中に五百の僧坊を作ろうとしたが、すべてが完成する前に王は亡くなった。これを見た阿闍世は、父王の後を承けて完成させる。〈以下、僧坊の「陞道」(梯子?)を作るにあたっての規定が示される〉(pp. 276c22-277a12)

⑥比丘尼律(經分別)；単提(波逸提) 98条(国外疑畏処遊行戒)

佛が王舎城にいたとき、国外の小国に反乱があったので阿闍世王は自ら軍を率いて出兵しこれを討った。(p. 323b3-25)

⑦増一法(一法)

瓶沙王が死んだとき、比丘たちは「内宿(食物の貯蔵)」の規定に違反することを

心配したが、佛は阿闍世が代わりとなるので「内宿」にはならないとする。

(p. 347b3-22)

⑧波羅夷法；妄語戒

目連が入定中に、跋耆の夜叉と摩伽陀の夜叉とが争い跋耆の夜叉が勝つのも見て、三昧から起って比丘に、跋耆の人が摩伽陀の人と争い、跋耆の人が勝つと予言した。その後、阿闍世王が跋耆の人に勝ったので、これが妄語ではないかと問題になる。世尊は「前を見て後を見なかっただけである」として無犯とする。〈上記の②経分別；波羅夷4条 (p. 13a16-b8) と一致〉 (p. 442a18-b12)

⑨五百比丘結集三藏法品

佛が般涅槃した後に、舍利の分配を申し出る者たちの一人として、「摩伽陀国主阿闍世王韋提希子」が含まれる。〈阿闍世は第八分を得て王舎城に塔を建てて供養した〉 (pp. 446b9-447a11)

⑩毘尼中雜品

阿闍世王は父の使っていた大床を見て「父は清浄で無過であったのに枉死した」と心に悔憂悩をおこし、家臣たちに「この諸床を運び去れ」と告げた。〈その後、その大床の置かれる場所が様々に変えられ、最終的に衆僧に施されるが、問題が生じ、佛は大床高床を蓄えそこに座したり臥したりするのを禁ずる。受け取って大切に保管することだけは許可される〉 (pp. 460c23-461a11)

以上が、十誦律に見られる用例であり、阿闍世の「父殺し」に関わる物語は破僧毘度に相当する調達事（上記④）に収められている。デーヴァダッタの破僧に関しては、大筋でパーリ律・四分律・五分律と共通する内容を有すると見ることができるが、随所に個別の物語が挿入されていて、特に「父殺し」に関する場面（上記④の(h)の部分）では、その状況が詳細に語られている。なかでも(h)の③④の部分は、『観經』序分と共通点が見られる点で重要であり、最終的に瓶沙王が自殺をしたという記述も、上記の四律にはない新しい要素である。全体的に見ても、阿闍世の登場する頻度が高いと見てよいであろう。また、④(h)⑤に見られる阿闍世の子に関する説話は、摩訶僧祇律やジャイナの伝承などと対比して注目に値すると思われる。

一方、十誦律においても韋提希は阿闍世の名前を示す場合に「阿闍世王韋提希子」あるいは「韋提希子阿闍世王」の形で用いられる以外に (p. 3c; 446b), 名前を伴う形では登場しない。但し、瓶沙王の夫人（あるいは大夫人）、及び阿闍世の母が、韋提希という名前を伴わずに登場する場面が見られる（上記、④(h)③および⑤参照）。

この点も、上記四律との明確な違いとして注意する必要がある。

【7】 根本説一切有部律にあらわれる阿闍世・韋提希

以下に根本説一切有部律にあらわれる阿闍世と韋提希の用例を掲げるが、ここに整理を行った内容は、⑩に挙げた衣事の例を除いて、それ以外はすべて漢訳資料に基づくものである。周知のようにこの部派の律は、サンスクリット原典が部分的に、チベット訳資料が完本として現存しているので、それらの対応箇所（チベット訳はデルゲ版と北京版の箇所）も併せて示した。さらに、この律に説かれる説話の概要、及びそれらと関係する資料についての情報を網羅しているパンルンの研究の当該頁なども併せて掲げた。

③経分別（『根本説一切有部毘奈耶』）；波羅夷2条（不与取学处）；因縁譚

- (a)但尼迦苾芻が摩揭陀国勝身（＝ヴァイデーヒー）子未生怨（＝アジャータシャトゥル）王の材木を手にいれようとする因縁譚。〈上記，十誦律①参照〉

(T. 23, pp. 635c23-637a27; D. Ca 51b5-58a3; P. Che 46a2-51b3)

- (b)畢隣陀婆蹉の神通力に関わる因縁譚〈影勝王（＝ビンピサーラ）が未生怨に賊を捕まえるように命じ、未生怨に話を聞いた畢隣陀婆蹉が神通力で賊から盗まれた物を取り返す〉(pp. 650b19-651a27; D. Ca 98b4-101a7; P. Che 88b3-91a1)

②経分別；波羅夷4条（妄説自得上人法学处）；因縁譚

未生怨王が栗姑毘（リッチャビ）を攻めて戦い、その結果を目連が予言するが、予言と異なる結果となる。世尊は「初勝を記して後を記さず」として無犯とする。

(pp. 677c22-679a26; D. Ca 192a4-199a1; P. Che 175b3-180a6)

③経分別；僧残11条（破僧違諫学处）；因縁譚

(pp. 700a29-704b27; D. Cha 11a6-13b6; P. Je 10b2-12b5; Panglung. p. 132)

- (a)提婆達多は、佛、舍利弗、目連などに神通力の教えを請うが皆に拒絶され、最終的に十力迦葉に教えてもらって、世俗道によつての初静慮を得て神通力を獲得する。

(p. 700a29-c27)

- (b)提婆達多は未生怨太子に神変を示して信頼を得て多くの利益を獲得する。

(pp. 700c27-701a21)

- (c)比丘たちがこの様子を佛に告げるが、佛は芭蕉、竹蘆、驢馬の譬喩で提婆達多を非難する。(p. 701a21-b9)

- (d)目連は迦俱陀天子により、提婆達多が神通力を失ったことを知る。その後、提婆達

多は世尊に衆僧を譲るように申し出るが、佛はこれを退ける。そのため天授（＝提婆達多）は世尊に殺害心を抱くが、世尊は比丘たちに「五種の師」について語る（pp. 701b10-702b21）

- (e)その後、天授は破僧をなそう考えて、四人の仲間を集め破僧を企てる。〈以下、提婆達多を諫めるための別諫の羯磨（白四羯磨）、仲間の四人を諫めるための羯磨（白四羯磨）が詳細に示されるが、五人はそれに従わない。最終的に世尊が提婆達多を直接呵責し諫め、学処を制定する（この時の破僧が成立したかどうかについての直接的な言及はない）〉（pp. 702b22-704b27）

④経分別；墮法59条（捉寶学処）；因縁譚

（pp. 854b3-846b1; D. Ja 230b1-242b1; P. Ñe 216b7-227b8; Panglung. p. 143）

- (a)未生怨は父を殺して自立したのち、使者を使って国の中で誰が多財を有しているかを調べさせていた。〈貧人が世尊の言葉で、大昔の隠された財を手に入れる物語〉（p. 845b3-c10）
- (b)六群比丘が栗姑毘園にいる時、戯具を見て音楽を奏でたが、それが未生怨の戦鼓の響きと似ていて、人々に迷惑をかけた〈以下に学処が制定される〉（p. 846a14-b1）

⑤経分別；墮法（波逸提）82条（入王宮門学処）

この部分には、勝音城の仙道王に関する物語や仙道王の本生譚など膨大な物語が語られているが、その一部に、仙道王と影勝王（＝ピンピサーラ）との関わりを説く部分があり、そこに「夫人が勝身（＝ヴァイデーヒー）で太子が未生怨」（p. 873c10-11; D. Ña 102a7-103a1; P. Te 95a7-95b8）との記述がある⁸⁾。

⑥比丘尼経分別（『根本説一切有部苾芻尼奈耶』）；波羅夷1条（不浄行学処）

- (a)〈妙賢比丘尼が不浄行を行うに至る因縁譚の一部〉その時、未生怨は自分の父を枉殺して大追悔を生じ、憂いを抱いて室にあった。〈この後、妙賢比丘尼と出会って彼女に魅せられた未生怨は、強引に不浄行を行う〉（pp. 912b25-913a21; D. Ta 43a1-46a4; P. The 42a2-45a2; Panglung. p. 162）
- (b)〈判例部分；妙賢比丘尼の前生因縁譚の一つ〉諸比丘が世尊に「妙賢比丘尼はいかなる業によって、阿羅漢果を證していながら、未生怨王のために不浄行を行うことになったのか」を尋ね、世尊は妙賢比丘尼の前生因縁譚を語る。

8) 『根本説一切有部苾芻尼奈耶』の「墮法82条（入王宮門学処）」の部分には、仙道王に関わる様々な説話が含まれているが、その物語に、仙道王が息子の頂髻に王位を譲って出家し比丘となり、阿羅漢となって後に、頂髻によって殺されてしまうという物語が含まれている。細部での話の内容は異なるが、父殺し（ここでは阿羅漢殺しも含まれる）というモチーフは、未生怨の場合と共通しており、注意を要すると思われる（T23, pp. 866c4-893c10）。

(p. 917a20-22; D. Ta 70b5-71a7; P. The 68a7-69a2; Panglung. p. 165)

⑦比丘尼経分別；墮法103条（知有怖遊行学処）

あるとき未生怨王は廣嚴城（リッチャビの城）に恨みを抱き、これを討とうとして、そこへ行くことを禁止した。〈十誦律の⑥比丘尼律単提98条（p. 323b3-25）と対応〉（p. 1003c4-18; D. Ta 279a5-279b2; P. The 245a7-245b4）

⑧犍度部；出家事（『根本説一切有部毘奈耶出家事』）

〈目連の出家因縁譚の一部〉王舎城に節会があつて、影勝王は別に用事があつたので、代わりに未生怨太子を使わした。（p. 1024a19-22; D. Ka 18b5-19a1; P. Khe 19a3-19a5; Eimer. II, p. 48）〈俱哩多（＝目連）の父は、影勝王亡き後に俱哩多を未生怨太子の家臣にしようとする〉

⑨犍度部；薬事（『根本説一切有部毘奈耶薬事』）

(a) 〈無稻稗龍王因縁譚の一部〉

世尊が王舎城にいたとき、未生怨太子は提婆達多にそそのかされて、父王を殺害し、自ら王位についた。未生怨が如来に様々な危害を加えようとするのを知って、母である韋提希はそれをやめさせようとするが未生怨は従わない。そこで世尊は王舎城を離れて室羅伐城へと行く〈世尊は「未生怨を無根信に住せしめることが出来るが今はまだその時ではない」と考える〉。

(T. 24, p. 19c2-16; D. Kha 13a6-13b5; P. Ge 12b2-12b8; Panglung. p. 20) 〈以下、無稻稗龍王の力で王舎城に飢饉が起き、世尊が王舎城を離れたのがその原因であると母韋提希より教えられ、未生怨が世尊に謝罪をする話が続く〉

(b) 〈波吒離大城の由来に関する話の末尾〉

その時、摩羯陀国未生怨王と廣嚴城栗姑毘などがそれぞれ虹橋を造った。（p. 23c8-9; D. Kha 28b4-28b5; P. Ge 26b2-26b3; Panglung. p. 21）〈その後、世尊のために龍が橋を造ってガンジス川を渡らせる話が続く〉

⑩犍度部；衣事(Civaravastuの冒頭部分) ※衣事の漢訳は現存しない

(a) 〈衣事の冒頭部分に、ビンピサーラにチェーラー（＝ヴァイデーヒー）が嫁ぐ物語があり、そこで「ヴァイデーヒー」という名前の由来が示される（GM. vol. III, part 2, p.13.17; D. Ga 55a3; P. Ñe 52a8）。さらに、二人の間に男の子（＝アジャータシャトゥル）が生まれ、後にビンピサーラを殺して王となるという予言が示される〉（GM. vol. III, part 2, pp. 1.16-15.16; D. Ga 50b3-55b7; P. Ñe 48a2-53a5; Panglung. p. 63）

(b) 〈アジャータシャトゥルの異母兄弟であるジーヴァカについての種々の物語の中で、

- 将来王位につく王子としてのアジャータシャトゥルも若干言及される> (GM. vol. III, part 2, pp. 15.17-40.13; D. Ga 55b7-66b1: P. Āe 53a5-63b5; Panglung. p. 63-65)
- (c)ヴァイデーヒーの陰部に腫れ物ができて、これをジューヴァカが治療した。(GM. vol. III, part 2, pp. 40.13-41.20; D. Ga 66b1-67a2: P. Āe 63b5-64a7)
- (d)悪友のデーヴァダッタに唆されて父王を殺してしまったアジャータシャトゥルが、腹部が膨張する病気にかかった。これをジューヴァカが直す(治療の際にアジャータシャトゥルの息子のウダーイパドラを巡る物語が含まれる)。(GM. vol. III, part 2, pp. 42.1-43.17; D. Ga 67a2-67b6: P. Āe 64a7-65a4)

① 健度部；破僧事 (『根本説一切有部毘奈耶破僧事』)⁹⁾

(a) <提婆達多の破僧の因縁譚 (1)>

その時、世尊は未生怨のために法を説き、彼に無根信を生ぜしめた。(p. 147c4-5; SBV. II, pp. 253.24-254.4; D. Āa 258a6-258b3: P. Ce 228a4-228a8)

<この後、提婆達多が悪心を起こし、五法を主張して破僧を企てる>

(b) <提婆達多の破僧の因縁譚 (2)> ※上記③経分別(僧残11条)と対応 (pp. 167c26-173c9; SBV. II, pp. 68.1-89.33; D. Āa 157a5-176a2: P. Ce 150b3-167b3; Panglung. pp. 103-104)

① 提婆達多は、佛、舍利弗、目連などに神通力の教えを請うが皆に拒絶され、最終的に十力迦葉に教えてもらって、初禪を得て神通力を獲得する。

(pp. 167c26-168c3)

② 提婆達多阿闍世太子(未生怨とはされない)に神変を示して信頼を得て多くの利益を獲得する。(p. 168c3-23)

③ 比丘たちがこの様子を佛に告げるが、佛は芭蕉、竹蘆、驢馬の譬喩で提婆達多を非難する。(pp. 168c23-169a11)

④ 目連は迦俱陀天子により、提婆達多が神通力を失ったことを知る。その後、提婆達多は世尊に衆僧を譲るように申し出るが、佛はこれを退ける。そのため提婆達多は世尊に七種の逆心を抱くが、世尊は比丘たちに「五種の師」について語る

9) 漢訳の破僧事に存在する提婆達多の様々な物語と、SBV. (及びチベット訳破僧事)に存在する物語との間には、配列順序などに一部異なりが見られる。SBV. とチベット訳に見られる物語の配列が一致することから、そちらが本来の順序であり、漢訳破僧事に見られる現在の構成は、漢訳される過程に生じた何らかの混乱によるものと思われる。ここでは、先に述べたように、漢訳に見られる順序に従って資料整理を行ったが、破僧事に見られる(a)(b)(c)(d)(e)の物語は、本来は(b)(c)(d)(e)(a)の順序であったと考えられる。

(pp. 169a12-170b24)

- ⑤その後、天授は破僧をなそう考えて、四人の仲間を集め破僧を企てる。〈以下、提婆達多を諫めるための別諫の羯磨（白四羯磨）、仲間の四人を諫めるための羯磨（白四羯磨）が詳細に示される。その後に僧残の学処制定が説かれるが省略が多い〉 (pp. 170b4-172b19)

- ⑥〈十力迦葉に対して無恩の提婆達多に関する話〉 (p. 172b19-173b7)

- ⑦世尊が王舎城にいたとき、提婆達多は五百の比丘と行動を共にし、阿闍世王に愛楽されていた。〈以下、阿闍世王無智前生譚が続く〉 (p. 173b8-c9)

(c) 〈提婆達多の破僧の因縁譚（3）〉 [二十億耳の誕生・出家因縁譚]

世尊が王舎城にいたとき、提婆達多は阿闍世王に父王を殺害しようそそのかされる。阿闍世王は、世尊に粥を届けようとする頻毘娑羅王を待ち伏せて父王を刺そうとするが、粥の容器だけを壊し、父王は逃れる。(p. 184c19-29; SBV. II, pp. 135.26-136.8; D. Ā 202a2-202a5; P. Ce 190a4-190a7; Panglung. p. 110) 〈以下、二十億耳の話が続く〉

(d) 〈提婆達多の破僧の因縁譚（4）〉 ※上記(c)の阿闍世の話に続く内容

未生怨が父王を殺害しようとしたことが人々のうわさとなる（この部分には「未生怨」の語と「阿闍世王」の語の両者が混在する）。そこで世尊は比丘達に、提婆達多と阿闍世の前生譚を語る。(pp. 187c18-188a28; SBV. II, pp. 149.16-150.9; D. Ā 211b2-212b6; P. Ce 197b8-199a1; Panglung. p. 111) 〈以下、さらに提婆達多無恩無報前生譚が続く〉

(e) 〈提婆達多の破僧の因縁譚（5）〉 (pp. 189a15-206a14; SBV. II, pp. 154.4-219.6; D. Ā 214a7-260a5; P. Ce 200a6-239b7; Panglung. p. 112/121/123)

- ①その時、未生怨王は、父王の前に剣を投げだし、瞋恚の心のあることを示した。

そこで父王は未生怨に瞻波城を与えることにする。瞻波城を得た未生怨は、提婆達多の言葉に従って、課税を重くした。すると苦しめられた瞻波城の人々が外国へと逃げてしまったので、父王は王舎城以外の摩揭陀国の人民をすべて未生怨に与えた。このようなことが繰り返されて、最終的に父王はすべてを未生怨に与えてしまう。それでも未生怨が人々を苦しめ続けたので、父王は未生怨を諫めたが、未生怨はこれを「王にたいする罪」とであるとして父王を幽閉する。(pp. 189a15-189c7; SBV. II, pp. 154.4-155.30; D. Ā 214a7-215b1; P. Ce 200a6-201a4)

- ②王が幽閉されたので、大夫人韋提希は王のもとへ食事を届けていた。これを知った未生怨王は守門人や諸宮人に命じて、父王に食物を届けることを禁止させる。

そこで韋提希は、今度は酥蜜を麩に混ぜて身体に塗り、脚の飾りに水を入れて王に届けた。これを守門人から聞いて知った未生怨は、韋提希が王のもとへ行くことも禁じた。(p. 189c7-27; SBV. II, pp. 155.30-156.16; D. Ā 215b1-215b7: P. Ce 221a4-201b1)

- ③その時世尊は耆闍崛山で経行をしていたが、それが父王の幽閉されている場所から見えたため、王は歓喜し、それによって生き長らえた。それを知った未生怨は、幽閉されたところから外を見えなくさせ、父王の足下を刺して立つことが出来ないようにした。(pp. 189c27-190a5; SBV. II, p. 156.16-28; D. Ā 215b7-216a4: P. Ce 201b1-201b5)

- ④苦しみ悲しむ父王が世尊に見えたいと願うと、世尊はこれを知り、目連に命じて影勝王のもとへと遣わす。目連は三摩地に入って幽閉されている王の前へ現れ、「王が現在の苦況にあるのは業因によるものである」との世尊の言葉を伝える。そこで父王は目連に、どこに「好食飲」があるのかを尋ねる。目連は「四天王処」にあると答えて、耆闍崛山に戻る。(p. 190a6-b3; SBV. II, pp. 156.29-158.21; D. Ā 216a4-217b3: P. Ce 201b5-202b7)

- ⑤その時未生怨王の子が指に瘡病を患い、未生怨は子供の指をくわえて痛みをやわらげようとしたが、膿が出たのでそれを吐き出した。これを見た韋提希は、かつて未生怨にも子供の頃に同じことがあり、その時父王は、未生怨の膿を飲んだことを話す。これを聞いて未生怨王は憐愛の心を起こし、父王がもし生きていれば、国の半分を与えると家臣に命ずる。人々が喜んで王のもとへと駆けつけようとする、その声を聞いた父王は「きっと自分に種々の苦刑を与えようとしているのだろう」と考えて、自らの命を捨てて北方天王宮に化生した。(p. 190b3-19; SBV. II, pp. 158.22-159.10; D. Ā 217b3-218a2: P. Ce 202b7-203a5) <以下、影勝王の前生譚が続く>

- ⑥家臣から父王が亡くなったことを聞いて未生怨王は悲しみ、愁いを抱いていた。その後、提婆達多は未生怨に、自分を佛となすように告げる。未生怨王は佛身は金色であるのに、提婆達多にはそれがないと言ったので、提婆達多は金匠を使って身を金色にするが、その際ひどい苦痛を受けた。(p. 191b26-c4; SBV. II, pp. 161.7-163.28; D. Ā 221a2-221a5: P. Ce 205b4-205b7) <以下、その苦痛に関する前生譚が続く；さらに佛の「脚輪相」に関して同様の事態が繰り広げられ、それについても前生譚が説かれる (pp. 191c4-192a14; SBV. II, pp. 163.28-166.4; D. Ā 221a5-222b2: P. Ce 205b7-206b8)>

- ⑦提婆達多は未生怨に、沙門喬答摩を殺そうとしていることを告げ、協力を依頼する。(p. 192a14-18; SBV. II, p. 166.5-10; D. Ā. 222b2-222b4; P. Ce 206b8-207a1) <以下、様々な方法で、提婆達多が世尊を殺害しようとする様子が語られ、併せてそれに関係する前生譚が随所に挿入されている。「出佛身血」の話や未生怨が保有していた「大象」の話などもここに示されるが詳細は省略>
- ⑧提婆達多は沙門喬答摩が主張している「四種修道（乞食・糞掃衣・三衣・露坐）」に異議を唱えて¹⁰⁾、比丘達に籌を取らせ、籌を取った五百人の比丘を従えて破僧を行った。(p. 202c5-21; SBV. II, p. 204.10-25; D. Ā. 249b5-250b7; P. Ce 230b7-231a8; Panglung. p. 121) <以下、舍利弗と目連が五百比丘を連れ戻す話や世尊の和合僧が破すことになった前生因縁譚などが続く>
- ⑨世尊が王舎城の侍縛迦菴沒羅園にいた時、未生怨王は侍縛迦の勧めに従って、世尊を供養しに出かけていく。(pp. 205a9-206a14; SBV. II, pp. 216.8-219.6; D. Ā. 258a5-260a5; P. Ce 238a4-239b7)
- <以下、『沙門果経』に相当する内容が語られる；摩訶僧祇律③経分別波夜提49条参照>¹¹⁾

⑫健度部；雜事（『根本説一切有部毘奈耶雜事』）

(a) <火生長者（Jyotiṣka）の物語の一部>

影勝王が火生長者の家に留まり、欲楽に耽溺して宮中に戻らなくなる。そこで家臣の進言により、未生怨太子が王を連れ戻しに行く。その時、火生長者のもとにあった寶珠を見て、未生怨はこれを手に入れようとするが叶わず、父王が亡くなって自分が王となった際にはこれを手に入れると宣言する。その後、未生怨は提婆達多の教えに従って、父を殺害し国主となって、火生の寶珠を手に入れようとする。(pp. 214c29-215b5; D. Tha 24a7-24b5; P. De 21b6-22a4; Panglung. p. 168) <以下省略>

10) 漢訳が「四種修道」と、四つの項目を挙げるのに対し、SBV. (II, p. 204.15-22) 及びチベット訳 (D. Ā. 249b5-250b7; P. Ce 230b7-231a8) には、五種の誓戒 (pañca-vratapada) として、アランニヤ住 (aranyakatva)、乞食 (piṇḍapātikatva)、糞掃衣 (pāmsukūlikatva)、三衣 (traicivarikatva)、露坐住 (ābhyavakāśikatva) が挙げられている。但し、ニョリのテキストでは、三衣と露坐住の二項目はチベット訳からの復元と思われる。いずれにしても、一般的にデーヴァグッタの破僧と結び付けられる「五法」とは異なる立場が示されている点には注意が必要である。

11) 尚、SBV とチベット訳破僧事にはこの『沙門果経』相当部分が完全に保存されているが、漢訳は冒頭部分が表示されるだけで、殆どを欠いている。『沙門果経』相当部分の末尾には阿闍世王の無根信の問題などが存在し、漢訳破僧事の混乱状況の問題とも併せて検討を行う必要があると思われる。根本説一切有部律所収の『沙門果経』に関しては、次の研究を参照されたい。梵文仏典研究会編「『沙門果経』和訳（1）」、佛教大学『仏教学会紀要』、第2号、1994年、1-32頁。同「『沙門果経』和訳（2）」、佛教大学『仏教学会紀要』、第3号、1995年、17-57頁。

(b) <コーサラ国王の勝光王 (Prasenajit) が佛に帰依する因縁譚の一部>

息子の悪生 (ヴィドゥーダバ; Viḍḍabha) に駆出された勝光王は王舎城へ赴き、父王を殺害して王位についた未生怨王に会おうとする。しかし、未生怨王が勝光王に会う直前に、勝光王は亡くなってしまう。このことを未生怨は世尊に告げ、世尊が勝光王の前生譚を語る。(pp. 238c1-239b18; D. Tha 87a4-88a2; P. De 83b7-84b4; Panglung. p. 172)

(c) <目連が迫害を受ける物語の一部>

舍利弗と目連が、無間地獄で外道の瞋刺拏に会った後、王舎城に入って、そこで[瞋刺拏の弟子の] 執杖外道に打たれそうになる。舍利弗はこの難を逃れたが、目連は業により外道に打たれてしまう。これを知った未生怨王が目連に、どうして神通第一といわれる目連が逃れることが出来なかったのかを尋ねる。目連はそれが業因によるものであることを未生怨王に教える。(pp. 287a8-288a13; D. Tha 237a1-239b3; P. De 224b1-226a7; Panglung. p. 180)

<以下、これが原因となって目連が涅槃に入る物語が続く>

(d) <涅槃前遊行行化事> = 佛の涅槃に至る過程が説かれる部分 (涅槃経相当部分)

世尊が王舎城の鷲峰山にいたとき、摩揭陀主未生怨王は佛栗氏国 (= ヴリジ国) と争っていた。(p. 382b29-c1; D. Da 228a2-228a3; P. Ne 219b5-219b6; Panglung. p. 198; MPS. p. 102) <以下、未生怨の大臣である行雨婆羅門に、世尊が七種不退転法を説く物語が続く>

(e) <世尊が涅槃した直後の部分>

世尊が涅槃されたことを知った大迦葉は、「勝身の子未生怨はようやく信根をおこした状態であるため、世尊が涅槃されたことを聞くと熱血を吐いて死んでしまう」と考えて、行雨婆羅門のもとへ行き、それを防ぐための方便を示す (方便の内容 = 園中の妙堂殿に世尊の本因縁 (世尊の生涯) の図を描き、人と同じ大きさの八つの函を用意して、七つの函には生酥を入れ、八つめには牛頭栴檀香水をいれておく)。大臣が用意を調えた後に、王は描かれた図によって世尊の入涅槃を知り、悶絶して地に倒れた。しかし、大迦葉に教えられて用意した函に順次入れていくと、最後の函に王の身体をいれた時、王は息を吹き返した。(p. 399b15-c23; D. Da 290a6-291a7; P. Ne 274b5-275b6; Panglung. p. 202; MPS. pp. 398-405)

(f) <佛身舍利の分配に関する部分>

拘尸那城の人々が世尊の舍利を供養していると、波波聚落の人々、遮洛迦邑、部魯迦邑、阿羅摩邑、吠率奴邑、劫比羅城諸釈子、薛舍離栗姑毘子が舎利の分配を求め

て集まってきた。さらに摩揭陀国未生怨王も舍利を得るために軍を率いて拘尸那城へ行こうとするが、佛恩の深さを念じて悶絶し象に乗ることが叶わず、行雨大臣を遣わすことにする。(pp. 401c1-402a16; D. Da 297a3-299a3: P. Ne 281a8-283a6; MPS. pp. 432-439)

〈以下、舍利が八分され、さらに十の仏塔が造られる経緯へ続く〉

(g) 〈王舎城五百結集事〉

(1)大迦葉が拘尸那城に集まった五百人の比丘と共に、結集を開催するための場所として「摩揭陀国勝身の子未生怨王は初めて信心をおこして、四事資身具を十分に用意してくれているので、そこで結集を行おう」と宣言する。(pp. 403c21-404a7; D. Da 303b5-304a6; P. Ne 287b1-288a2)

(2)上記の宣言の後、皆が摩揭陀へ赴いた。未生怨王は佛に対して深信をもっていたため、象から落ちて佛の力で身体に傷を受けずにいた。(p. 404a8-23; D. Da 304a6-305a2: P. Ne 288a2-288b3) 〈以下、大迦葉が王と出会い、結集の開催を申し出る話、阿難陀の過失の話、五百結集の開催へと続く〉

(h) 〈大迦葉の涅槃の物語〉

(1)三蔵聖教の結集が終わって、大迦葉は阿難陀に教法を付嘱して涅槃に入ろうとする。そのことを大迦葉は未生怨王に告げようと王のもとへと赴くが、王は眠っていた。迦葉は守門人に起こすように告げるが、王の怒りを畏れる守門人は王を起こせないと答える。そのため、王が眠っている間に、大迦葉は涅槃に入ってしまう。(pp. 408c1-409a26; D. Da 316b4-318a3: P. Ne 299a8-300b4)

(2)迦葉の入涅槃によって大地が振動し未生怨王が目覚める。守門人から事情を聞いて王は地に悶絶したが、冷水を顔に注がれて目を覚まし、阿難陀のもとへ行く。そこで、阿難陀は王とともに鷄足山へと行き、王は涅槃に入った迦葉に見えることが叶う。(p. 409a26-b20; D. Da 318a3-318b5: P. Ne 300b4-301a6) 〈以下、迦葉を荼毘に付そうとする王に対して、迦葉の身を焼いてはならないと阿難陀が教える話へと続く〉

(i) 〈阿難陀の涅槃の物語〉

阿難陀は、奢搦迦比丘に教法を付嘱し、佛の記（末度羅国でグプタとウパグプタが佛滅百年後に佛事をなすこと）を伝えて涅槃に入ろうとするが、未生怨王と廣嚴城の人々（＝栗姑毘子）とが自分の舍利を巡って争わないように、ガンジス河の中流で涅槃に入ろうとする。それを知った未生怨王と廣嚴城の人々とがその場へと駆けつける。〈この後、阿難陀が涅槃に入る直前に、日中（＝末田地那）に具足戒を授

け、教法の護持を付嘱し、佛の記（佛入滅百年後に末田地那が迦湿彌羅に教法を流行させること）を伝える。その後、慶喜（＝阿難陀）は涅槃に入り、身体を半分に分け、一方を未生怨に、もう一方を廣嚴城の人々に与える。廣嚴城の人々はストーパーを造り、未生怨は波吒離に塔を造って供養をした。（pp. 410b1-411a5; D. Da 320b4-322a4; P. Ne 303a5-304b4）

以上が根本説一切有部律における用例であるが¹²⁾、他律に比べてその数は非常に多く、内容的にも特異な例が多く説かれている。阿闍世の「父殺し」説話は、主に⑩破僧事の(e)において、その状況が詳細に語られているが、そこに見られる内容は先に掲げた十誦律の内容と比較的よく一致しており、ビンピサーラ王が延命していく状況や、阿闍世の子供の逸話、最終的に自殺を図る点などに幾つかの共通点が見いだされる。また、釈尊の涅槃後の状況を詳細に示す中に阿闍世が登場してくる点も、他の律には見られないものである（上記⑪雑事の(e)(f)(g)(h)(i)参照）。そこでは佛弟子の涅槃との関わりで新たな物語が創出されており、根本説一切有部の特異な一面を現しているといえることができる。

一方、根本説一切有部律において初めて韋提希は名前を伴い、具体的な人物として描かれている。上に掲げたように〈⑨犍度部；薬事（T. 24, p. 19b; 20a）〉〈⑩犍度部；衣事の(a)と(c)（GM. III-2, p. 13/pp. 40-41）〉〈⑪犍度部；破僧事の(e)（T. 24, p. 189c; 190b）〉〈⑤経分別；墮法82条（入王宮門学処）（T. 23, p. 873b）〉などの部分にあらわれるが、十誦律で名前を持たず「ビンピサーラ王の夫人」とされていたものが、⑪の破僧事などで明確に韋提希とされている点は、『観経』との関わりを考える上でも重要であると言える。尚、他律と同様に、阿闍世（未生怨）の名前を掲げる場合に「勝身（韋提希）之子」が付される場合も若干存在する（T. 24, p. 399b; 403c）。

【8】 鼻奈耶にあらわれる阿闍世・韋提希

以下に鼻奈耶の用例を掲げる。鼻奈耶は経分別部分のみが現存する律文献で、上記

12) 義浄の漢訳について言えば、Ajātaśatruの訳語としては「未生怨」と「阿闍世」の二種が混在している。殆どの場合「未生怨」が用いられているが、一部に集中的に「阿闍世」の用例が見いだされる（特に破僧事の⑩の(b)(c)(d)の部分）。義浄の訳語に不統一が見られることは周知のことであるが、内容的にも混乱の見られる漢訳破僧事の一部に、集中して異なる訳語が存在することには注意すべきであろう。このような訳語の不統一は、根本説一切有部律の場合、その訳経事情を反映しているのかもしれない。

六広律の様な犍度部が伝えられていない。従って、上記の六律とは一線を画して扱う必要があるが、この律が十誦律に先行する古訳時代に属するものであることや¹³⁾、説一切有部系の律とされること¹⁴⁾、さらに『観経』と類似する「阿闍世の父殺し」説話を含むこと等を考慮して、用例を掲げることにした。

①経分別；波羅夷 2 条（盜戒）因縁譚

〈檀貳迦比丘の因縁譚の一部〉自分で作った庵舎が壊されたのを知り、檀貳迦は羅闍祇城の木工師のところへ行き、阿闍貴王が自分に材木を与えたと語った。(T. 24, p. 853a5-20) 〈以下、因縁譚がさらに続く〉 ※十誦律①参照

②経分別；波羅夷 4 条（妄語戒）随戒の因縁譚

- (a)出家した調達は、佛、舍利弗、目連などに神通力の教えを求めるが皆に拒絶され、最終的に阿難に教えてもらって、世俗の四禪を得て神通力を獲得する。(p. 859a11-b11)
- (b)調達は佛への嫉妬心から、阿闍世太子に神通力を示して信頼を得て、多くの利益を獲得する。(p. 859b11-c6)
- (c)比丘たちがこの様子を佛に告げるが、佛は建陀利樹、竹葦、騾、狗の譬喩によって調達を非難する。(p. 859c6-16)
- (d)目連は梵天に生まれた陝浮陀により、調達が神通力を失ったことを知る。その後、調達は佛に、衆僧を譲るように申し出るが、佛はこれを退ける。そのため調達は佛に対して悪意を起こす。(pp. 859c17-860a14) 〈以下、改正された学処が示される〉 ※十誦律④参照

③経分別；僧残 6 条（無主作小房戒）因縁譚

〈因縁譚の冒頭部分に、檀貳比丘が以前、木舎を作ろうとして阿闍貴王に殺されそうになったことを回想する部分がある。(p. 865b7-24)〉

④経分別；僧残 10 条（破僧違諫戒）因縁譚 ※十誦律④の(g)及び(h)の①～⑤参照

- (a)調達は阿闍世から、多くの利益を獲得していた。比丘達がこの様子を世尊に告げるが、世尊は狗の譬喩によって調達を非難する。(p. 869a1-24)
※上記、①の(b)(c)参照
- (b)調達は四人の弟子を従え、五百人の比丘と共に破僧を行った。舍利弗と目連は、調達が休んでいるうちに五百人の比丘を連れ戻し、結局、調達と四人の弟子だけが破

13) 鼻奈耶の翻訳事情等に関しては、平川彰『律蔵の研究』、1960年、東京；山喜房佛書林、155-160頁を参照されたい。

14) 注13前掲；平川彰『律蔵の研究』、423頁参照。

僧を行った。これを因として世尊が学処を定める。(p. 869a24-870a5)

- (c)世尊が王舎城に居るとき、調達は佛を害そうと、人を使って世尊に石を落とす〈結局は世尊の足から血を出すだけで、世尊を殺害しようとする様々な企てはことごとく失敗する〉。それにより世尊は阿難に命じて、調達の行いは佛法僧教ではないということを、羅閱城の人々に知らせる。(p. 870a6-c6)

- (d)①世尊への瞋意を増幅させた調達は、阿闍世太子のところへ赴いて、太子に父を殺して王となることを勧め、自分は世尊を殺して新しい佛となることを申しでる。王子もそれに同意する。(p. 870c6-15)

②阿闍世は、頻婆娑羅王が乗り物に乗って園觀から戻ってくるのを待ち伏せ、剣を投げて殺そうとするが、王はこれを免れる。阿闍世は逃げるが、四人の家来たちに捕らえられ王の前に連れ出される。王が太子に理由を尋ね、太子は調達の勧めによることを白状する。これを聞いて、ある四人の家来の一人は「一切の沙門釈子を殺すべし」と主張し、もう一人は「調達とその弟子のみ殺すべし」と主張し、[もう一人は「調達のみ殺すべし」と主張し]¹⁵⁾、もう一人は「誰も殺すべきではない」と主張した。(pp. 870c15-28)

③王は阿闍世太子に、何故、王の命を奪おうとするのかを尋ね、結局、太子の考えに同意して王位を譲った。その後、阿闍世は家臣に命じて父王を捕らえ牢獄に入れるが、父王に惹かれる多くの人々が食べ物を持って牢獄を訪れるため、王は生き長らえた。これを知った阿闍世は、牢獄の番人に人が入ることを禁止させる。すると今度は、諸夫人が密かに父王に食べ物を差し入れた。阿闍世は諸夫人が牢獄に入ることを禁ずる。次に、第一夫人が食べ物を衣に塗り、さらに上に衣をつけてそれを隠して、父王に差し入れをした。これを知った阿闍世は、第一夫人が牢獄に入ることも禁ずる。(pp. 870c28-871a15)

④次に父王は、獄中から耆闍崛山を見て、世尊、舍利弗、目連などが山を上り下りするのを見て歓喜し、それによって生き長らえる。これを知った阿闍世は、外が見えないように高い障害物を置くことを命ずる。すると今度は世尊が王舎城へと入城し、それによって様々な瑞應がおこった。瑞應がおこったことにより世尊が入城したことを知った父王は、隙間から世尊を見て道を獲得し、それによって生き長らえた。これを知った阿闍世は、刀で父王の脚の底を削り皮をはがせた。そ

15) この部分には、家来の主張が三種類あったと示されているが、四人の家来が合議したこと、及び十誦律の対応箇所にも四種類の主張が示されていることから、[] 内の内容を補った。

の結果、父王は毎日に衰弱していった。(p. 871a15-b6)

- ⑤ある時阿闍世が宮中で母と共に食事をしていた。阿闍世には幼い子供がいたが、そのとき子供は外で闘鶏と戯れていた。阿闍世と一緒に食事をするように呼ばれたが、子供は鶏と一緒にでなければ食べないと答えた。そこで、阿闍世は夫人に、大王である自分が鶏と一緒に食事をするようになることを嘆いた。すると夫人は、かつて阿闍世が幼い頃に手の指に腫れ物ができて痛みで眠れなかったとき、父王がこれを口にふくんで暖めて痛みをとり、さらに膿までも飲んだことがあることを語り、王を殺さないように願う。阿闍世はこれを聞き入れ、人々が喜んで父王の牢獄にかけつける。それを聞いた父王は、阿闍世は凶悪で孝順心がないため、自分に何をなすかわからないと考え、自ら床下に身を投じ命を断った。これにより、阿闍世は父王の命を奪い無救罪を得た。(p. 871b6-26)
- ⑥佛はこの出来事によって、比丘達に、殺父者・殺母者を比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷にしてはならず、八關齋を聞くことを許してはならないとする。
(p. 871b27-c4)

⑤経分別；僧残11条（助破僧違諫戒）因縁譚

調達は、阿闍世王の保有している象を使って世尊を殺そうと考え、象師に世尊を殺すよう依頼する。(pp. 871c20-872a11)

⑥経分別；波逸提45条（觀軍戒）因縁譚

六群比丘は、波斯匿王と阿闍世王がよく戦いを行っていたので、軍馬を觀に出かけていった。人々が非難したので世尊はこれを禁止した。(p. 887b6-11)

以上が鼻奈耶における用例であるが、既に明かなように、この律に見られる殆どの用例が十誦律に見られる内容と対応している。特に、「阿闍世の父殺し」説話（上記④の部分）は内容的にほぼ完全に一致しており、阿闍世に関する説話という点からも鼻奈耶が説一切有部系の律であり、それも十誦律に近い関係にある原典から翻訳されたことが改めて確認されたと思われる。但し、上記の説話が因縁譚として組み込まれている位置や対象となる規定については必ずしも十誦律と一致するわけではなく、律の構成そのものが同じであったとは言えない。この点については、訳語の異同の問題とも併せて、更に検討を行う必要があると言えよう。

【9】 おわりに

律蔵にあらわれる阿闍世と韋提希の姿を見てきたが、上記の六広律、及び鼻奈耶に描かれる二人の姿の中から主要な要素を抽出し、共通する項目ごとにまとめてみると、おおよそ以下のようになろう。

〈阿闍世に関する諸要素〉

- 1) デーヴァダッタに唆されて父王の殺害を企てる＝総ての律（但し細部では異なる）
 - ①王位を譲られる＝パーリ律・五分律・鼻奈耶
 - ②父王が叱責する＝四分律
 - ③状況は不明で「殺父」の事実のみが示される＝摩訶僧祇律
 - ④父王を剣（刀）で殺そうとするが失敗する＝十誦律・根本説一切有部律・鼻奈耶
 - ⑤父王を幽閉し、死にいたらしめる（父王が自害する）＝十誦律・根本説一切有部律・鼻奈耶
- 2) 『沙門果経』成立に関与する＝パーリ律・摩訶僧祇律・根本説一切有部律
- 3) 他国と争う（目連の予言と関係する）＝五分律・四分律・摩訶僧祇律・十誦律・根本説一切有部律
- 4) 「別衆食」の因縁譚に関わる＝四分律・十誦律
- 5) 息子（優陀夷跋陀羅）の存在、及びその子の病氣＝摩訶僧祇律・十誦律・根本説一切有部律・鼻奈耶
- 6) サンガに対して種々の援助を行った＝摩訶僧祇律・十誦律・根本説一切有部律
- 7) サンガを援助したことにより王舎城が第一結集の開催地となった＝摩訶僧祇律・十誦律
- 8) ダニカ比丘により保持していた材木が使われる＝十誦律・根本説一切有部律・鼻奈耶
- 9) 不与取波羅夷の「五錢」の制定の因縁となる＝十誦律・根本説一切有部律
- 10) 釈尊の舍利を分配される＝根本説一切有部律
- 11) 佛弟子（大迦葉・阿難陀）の涅槃に関わる＝根本説一切有部律

〈韋提希に関する諸要素〉

- 1) 韋提希が具体的な人物として描かれない＝パーリ律・五分律・四分律・摩訶僧祇律

2) 名前を伴わずに具体的な人物として描かれる＝十誦律・鼻奈耶

3) 名前を伴い具体的な人物として描かれる＝根本説一切有部律

結局、上記の七律の総てに共通するのは、「阿闍世がデーヴァダッタに唆されて父王殺害を企てた」という一要素だけであり、それも具体的な状況や、その後の結末に至っては、律によってかなり異なると言わざるをえない。しかし、諸律に見られる「阿闍世の父殺し」説話のみに注目した場合、パーリ律・四分律・五分律がほぼ共通した内容を有するグループを形成し、十誦律・根本説一切有部律・鼻奈耶が別のグループを、そして摩訶僧祇律が独自の内容を保持していると見ることが出来る。諸律に共通する項目をもって、それが古い要素であるとか、歴史的な事実であると断定することは勿論できないが、「阿闍世の父殺し」説話を巡る諸律の扱いを、平川彰が想定している律蔵の展開の歴史に重ね合わせた時¹⁶⁾、阿闍世に関係する諸要素の増加傾向（あるいは付加・発展の傾向）は、概ね律蔵の新古によって理解できるものと言える。その中にあって、十誦律（及び鼻奈耶）の伝える説話は、「阿闍世の父殺し」説話がそれ以前の物語から発展し、大きな変化を被ったものと位置付けることが出来よう。そして、それは同系統に属する根本説一切有部律へと継承されていったと考えられる。一方、韋提希が具体的な人物として説話の中に登場するのは、説一切有部系の資料のみに限られていることが確認された。それも、十誦律（及び鼻奈耶）においては名前を持たず、根本説一切有部律だけが明確に名前を有する登場人物として扱っている点は、阿闍世の場合と同様に、十誦律（及び鼻奈耶）から根本説一切有部律への展開の過程が示されていると考えられる。また、「阿闍世の父殺し」説話に関しては、上記七律の中で摩訶僧祇律だけが特異な立場にあることにも注目する必要がある。「阿闍世が父殺しを行った」という認識は摩訶僧祇律の中にも存在しているが、他律すべてに見られる提婆達多との関わりを全く示していない点は、この律を保持していた集団の特殊な歴史認識が反映しているのかもしれない。

さらに、七律に示される阿闍世像を全体的に捉えた場合、「父殺し」説話に代表されるような阿闍世像はあくまで彼の有する様々な側面の一つにすぎず、そのイメージとは結びつかない「国王」あるいは「有力者」としての側面も数多く存在していることを見逃してはならないと思われる。それらの場面で、阿闍世はしばしば仏教の擁護者としての国王としても描かれている。結局一つの律の中に、「父殺し」を行った悪

16) 平川は、現存する律蔵の成立の新古に関して、パーリ律⇒四分律・五分律⇒摩訶僧祇律⇒十誦律⇒根本説一切有部律という順序を想定している。平川彰『律蔵の研究』、1960年、東京；山喜房佛書林、291-407頁、及び511-588頁等参照。

しき姿と、一般的な国王としての姿の二面が混在していることになる。しかし、五逆罪の一つとされる「父殺し」を行った者の扱いが、律という教団法に関わる文献の中で統一されていない点は不自然である。律の編纂者がいかなる理解のもとでこのような状況を描き出していったのかについて、残念ながら現時点では何も語れないが、「阿闍世の父殺し」説話がほとんどの場合、提婆達多との関わりの中で語られているという事実が何らかの鍵を握っていると推測される。従って、阿闍世の実像に迫るためには、提婆達多、及び提婆達多の破僧についても改めて検討を行う必要があると思われる。

また冒頭でも触れたように、ジョナサン・シルクによってジャイナ文献中に存在する説話と『観経』との対応関係が明らかにされたが、彼が提示したジャイナ文献中の説話の特徴の一つとして、「阿闍世と彼の息子に関するエピソード」が挙げられる¹⁷⁾。このエピソードと類似した説話が、上述したように摩訶僧祇律・十誦律・鼻奈耶・根本説一切有部律にも存在している。摩訶僧祇律はここでも特殊な位置を占めるが、説一切有部系の物語においては、このエピソードを原因として父王は自らの命を絶つことになるのであり、その意味でも重要な要素と考えられる。従って、律蔵にあらわれる阿闍世や韋提希について考えるためには、このようなジャイナ資料等とのより詳細な比較検討も必要と思われる。

最後に、律蔵にあらわれる阿闍世・韋提希の姿と『観経』との関わりについて考えてみたい。既に明らかなように、『観経』序分に説かれる物語は、説一切有部系（特に根本説一切有部）の説話と最も近い関係にある。両者の（特に『観経』と破僧事との）対応関係については、既に末木が詳細な検討を行っているので、ここで改めてその点に触れる必要はないであろうが¹⁸⁾、『観経』序分の説話が、比較的成立の新しい根本説一切有部律に最も近い関係にあることは、上記の七律全体の用例を踏まえた上で改めて確認しえたと思う。何よりも、『観経』の主人公である韋提希が、上記の七律の中で根本説一切有部律にしか登場していない事実は、両者の関係を考える上で重要な点と思われる。しかしながら、『観経』序分の主人公はあくまでも韋提希である。頻婆娑羅王の延命の様子を語る部分でも、それは韋提希の行為を強調する形で説かれているし、また阿闍世の怒りを買って殺されようとするのも韋提希である。律蔵

17) 注1前掲, Silk 論文, pp. 205-212 参照。

18) 注1前掲末木論文の““The Tragedy in Rājagṛha” in the *Guan-wu-liang-shou-jing*” 258-264 頁, 及び「観無量寿経—観仏と往生」47-73頁等参照。

に見られる説話では、世尊や目連は頻婆娑羅王のために彼のもとへとやって来るが、『観経』では韋提希のために彼女のもとへとやって来る。それはまるで頻婆娑羅のいた場所に韋提希を置き換えているような状況である。従って、律に見られるような何らかの物語を単に凝縮しただけで、直ちに『観経』序分の内容が出来上がるわけではなく、本来頻婆娑羅王（あるいは阿闍世）の視点で描かれていた物語が、韋提希の視点で再構成されなければ、『観経』序分の物語とはならないのである。それがいかなる理由や状況によるのかについては、初期経典や大乘経典なども含めた、より詳細な検討を行わなければならないであろう。その意味でもジャイナ文献との比較などは重要であるし、また提婆達多の問題や、摩訶僧祇律の位置づけなどを改めて検討することが必要であると思われる。残された課題は多いが、今回整理を行った資料を基にして、今後更なる検討を行っていきたいと考える。

【略号表】

- D. = Derge (sDe dge) Kanjur, *The sDe dge Mtshal par Bka' 'gyur. A Facsimile Edition of the 18th Century Redaction of Si-tu Chos-kyi-'byun-gnas, Prepared under the Direction of H. H. the 16th rGyal-dban Karma-pa*, 102 vols., Delhi (Delhi Krmapae Chodhey GyalwaeSungrab Partun Khang) 1976-81.
- Eimer. = Helmut Eimer, *Rab tu 'byun ba'i gzi, Die tibetischen Übersetzung des Pravrajyāvastu im Vinaya der Mūlasarvāstivādin*, Teil I und II, Asiatische Forschungen Band 82, Wiesbaden 1983.
- GM. = Nalinaksha Dutt, *Gilgit Manuscripts*, Vol. III, part 1-4, Delhi 1984 (Second Edition).
- MPS. = Ernst Waldschmidt, *Das Mahāparinirvāṇasūtra, Text in Sanskrit und Tibetisch, verglichen mit dem Pāli nebst einer der chinesischen Entsprechung im Vinaya der Mūlasarvāstivādin*, Teil I-III, Berlin 1950/51.
- P. = Peking Kanjur, *The Tibetan Tripitaka, Peking Edition*, kept in the Library of the Otani University, reprinted under the supervision of the Otani University, Kyoto, ed. Suzuki T. Daisetsu, 168 vols., Tokyo/Kyoto 1955-61.

- Panlung. = Jampa Losang Panglung, *Die Erzählstoffe des Mūlasarvāstivāda-vinaya, Analysiert auf Grund der tibetischen Übersetzung*, Studia Philologica Buddhica (Monograph Series) III, Tokyo: The Reiyukai Library 1981.
- SBV. = Raniero Gnoli, *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, part I & II, Roma 1977/78.
- T. = 『大正新修大藏經』
- Vin. = *The Vinaya Piṭakam*, ed. Hermann Oldenberg, vol. I-V, PTS: London 1964/77/82/84.

(付記)

本小論の作成に際して、松永知海氏、佐々木閑氏、平岡聡氏から貴重な研究資料を閲覧させていただく機会を頂戴した。この場を借りて、改めてお礼を申し上げる。